

<今日の説教のポイント マタイによる福音書 23 章 37～39 節 >
神様の独り子を十字架につけたイスラエルに救いはあるのか？

①(37a) 神様は何度もイスラエルの罪を赦して下さった。

イエス様は、律法学者たちとファリサイ派の人々の偽善を非難された後 (36 節まで)、イスラエルの民全体の罪を非難することに移られます。しかし、ここで一番強調されている大事な点は、そのイスラエルの罪を神様が何度も赦して下さったということです。このことを記しているのが旧約聖書です。「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」(37)は、かつて預言者イザヤがイスラエルに神様に信頼して立つように叫んだときの言葉を思い出します (イザヤ書 31 章 5 節、その前後を読むことが重要)。

②(37b-38) イスラエルに救いはない？ だとすると、私たちにも救いはない！

しかし、結局、それは叶わずにイスラエルが神様に背を向け続けたことを記すのも旧約聖書なのです(37b)。「見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる」(38)は、その結果、神様がイスラエルの民 (お前たちの家) を見捨てると言われているように思える言葉です。ついに神様が送られた独り子イエス様を殺してしまうのですから、「イスラエルは滅ぼされても仕方ない」と思うかもしれませんが、しかし、そうだとすると、私たちに待っている結末も同じ滅びです。なぜなら、イスラエルは私たちの代表であり、私たちは神様に信頼し切れず、不安に陥り、ついに神に聞かずに背を向け、己の道を行くこと多い者だからです。

③(39) 異邦人が救われた後にイスラエルも救われる？！ 神様の「計画」！

39 節ではイエス様の死と終わりの日の再臨のことが考えられています。38 節では確かにイスラエルに対する「見捨てられ」が言い渡されていましたが、それは終わりの日、主が再臨される時までなのです。パウロは、ローマ書 9～11 章で、このイスラエルの救いのことについて記しています。「すなわち、一部のイスラエル人がたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです」(ローマ 11:25-26)。ここでパウロは、「イエス様の十字架の死で赦されない 罪はない」ということから神様の救いの計画 (ローマ 11:25) を考えています。しかも、ここで使う「計画」という言葉も、私たち人間が考えて立てるような計画とは違うということも大事な点です (ローマ 11:33-36)。私たちの思いを超えた恵みに満ちた神様の救いの御計画なのです！ これを受け入れることを神様は喜ばれるのです (使 3:15-20) !